

せみた 蝉田遺跡

遺跡番号 208-151
調査回数 第1次
所在地 山形県村山市西郷
北緯・東経 38度29分45秒・140度22分13秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）
調査面積 6,000 m²
受託期間 平成24年4月6日～平成25年3月29日
現地調査 平成24年5月22日～11月30日
調査担当者 齊藤主税（現場責任者）・庄司昭一・吉田満
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山東根土地改良区・村山市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所

遺跡種別 集落跡
時代 奈良時代・平安時代・近現代
遺構 掘立柱建物跡・柱列・河川跡・溝跡・土坑・柱穴
遺物 土師器・須恵器・縄文土器・陶磁器・石製品・木製品・金属製品・種子（文化財認定箱数：121箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

蝉田遺跡は村山市名取西郷地区に所在する。遺跡の西側には、最上川と蝉田川が蛇行しながら流れる。周辺の地形は沖積地で水田が広がる。また、遺跡南西地区にある浮沼^{うきぬま}という地名の通り、地盤が沼のように緩い場所に遺跡が立地している。

東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に伴い、工事に係る約6,000 m²（南北100 m×東西60 m）について調査を行った。



図1 調査概要図（縮尺任意）

遺構と遺物

遺構は掘立柱建物跡・柱列・河川跡・溝跡・土坑・柱穴等で平安時代の遺構が主体で、遺物も同時期の遺物が多く出土した。僅かに縄文時代・奈良時代・近世の遺物も出土している。

掘立柱建物跡は、柱間2間×2間の総柱建物跡1棟(SB70)、2間×2間の側柱建物跡(SB26・SB84)と想定される2棟の計3棟が検出された。柱穴の規模・柱列の軸線共に違いがあり、時期差があると想定される。SB26の柱穴の掘り方から白い火山灰が検出された。これは青森県と秋田県の県境にある十和田火山が噴火した際(西暦915年)の火山灰の可能性があり、本建物跡が西暦915年以降に建てられたことが想定される。

柱列は2列(SA18・SA83)確認された。SA18はSB26の西側に隣接し、柱列の軸線もほぼ同じだが、柱穴の平面形・柱間に若干違いがみられる。SB26に伴う施設かは不明である。SA83はさらに西側にあり、南北方向に並ぶ6基の柱穴から構成される。直径約50cmの柱穴が約1.6mの間隔で規則的に並んでいる。柱穴の規模・間隔から推測する限り、柵のような施設が考えられる。

河川跡は東西方向に流れるSG6と南北方向に流れるSG50の2条確認された。調査区東側で隣接し、共に調査区外へと続いている。SG6は幅約5～8m、深さは最深部で約2mの大きな河川跡で、東から西へ流れている。土層断面を観察すると、十和田火山灰と考えられる堆積と、それより新しい流路の存在が確認できた。つまり、915年以降も流れていたことがわかる。また、砂層からは土師器・須恵器等の土器と多種の木製品が多く出土した。僅かに川底から縄文時代の土器・石器も出土している。SG50は北から南へ流れている。SG6と同時期に流れていたかは定かではないが、最終の流路ではSG6の方が長く流れていたことがわかる。出土遺物はSG6に比べ極端に少ない。

土器は土師器の出土量が多く、須恵器は少量である。その中でも完形の土師器杯の出土数が多いことが特筆される。また、土師器杯の体部に「定」と墨書される土器(写真7)や、底部に綱代の痕跡が残る土器(写真8)も確認されている。河川跡確認面では僅かに灰釉陶器も出土している。

木製品は、齋串・人形・鳥形等の形代(写真9)、荷札状木製品、篋・柄・鋏先・横槌等の農具、横櫛、檜扇、下駄、木器、曲物、木鏝、端部が焦げ付いた棒状・板状木製品等が多種出土している。その中でも、形代の出土は県内でも希少で特筆される遺物である。それらは主に水辺で行われる「祓い」という祭祀儀式に用いられる道具である。穢れや罪を水に祓い流す目的で使用されたとされている。

SG6の年代は、奈良時代の遺物が含まれているが、主に平安時代前期頃(9世紀～10世紀前葉)と想定される。

溝跡は平安時代と近世～近代の2時期ある。SD3からは平安時代頃の土師器・須恵器等の土器、SD69からは近世の陶磁器と現代のガラス製品等が出土している。

土坑は15基ほど確認された。調査区北東側に、南北約3～4m×東西約1.5mの規模の土坑が3基並んで検出され、大量の炭化物・火山灰・土器片が伴う(写真3)。他にも炭や焼土が多量に混入する土坑が調査区北東部分に多く確認された(写真5)。近接するSG6から火を付ける付木や焼痕のある木製品が出土することから、「火」を取り扱う何らかの行為が執り行われたことが考えられる。また、須恵器大甕が意図的に埋設された可能性がある土坑(写真4)もSG6周辺で検出された。

まとめ

今回の調査では、奈良・平安時代と近世～近代の遺構・遺物が確認された。比較的、生活に直接関連する住居跡等の遺構が少ないことや立地等から推測する限り、少なくとも「居住」を目的とした場所(集落)ではなく、違う目的で利用されたと考えられる。SG6から形代等が出土したことで、祭祀行為に関する場所と想定される。

遺物は奈良・平安時代の土器や木製品等がコンテナで約120箱以上となった。SG6出土遺物は、総数の2/3以上を占める。ほぼ完形の土器や多量の木製品が見つかり、その中でも県内では希少な齋串・人形・鳥形・檜扇等の祭祀遺物(木製品)が特筆される。また、河川跡も含め多くの遺構から、十和田火山灰と思われる堆積が確認され、火山灰が降灰する前後に遺跡が営まれていたことがわかる。



写真1 SG6完掘状況(西から)



写真2 SG6土層断面(西から)

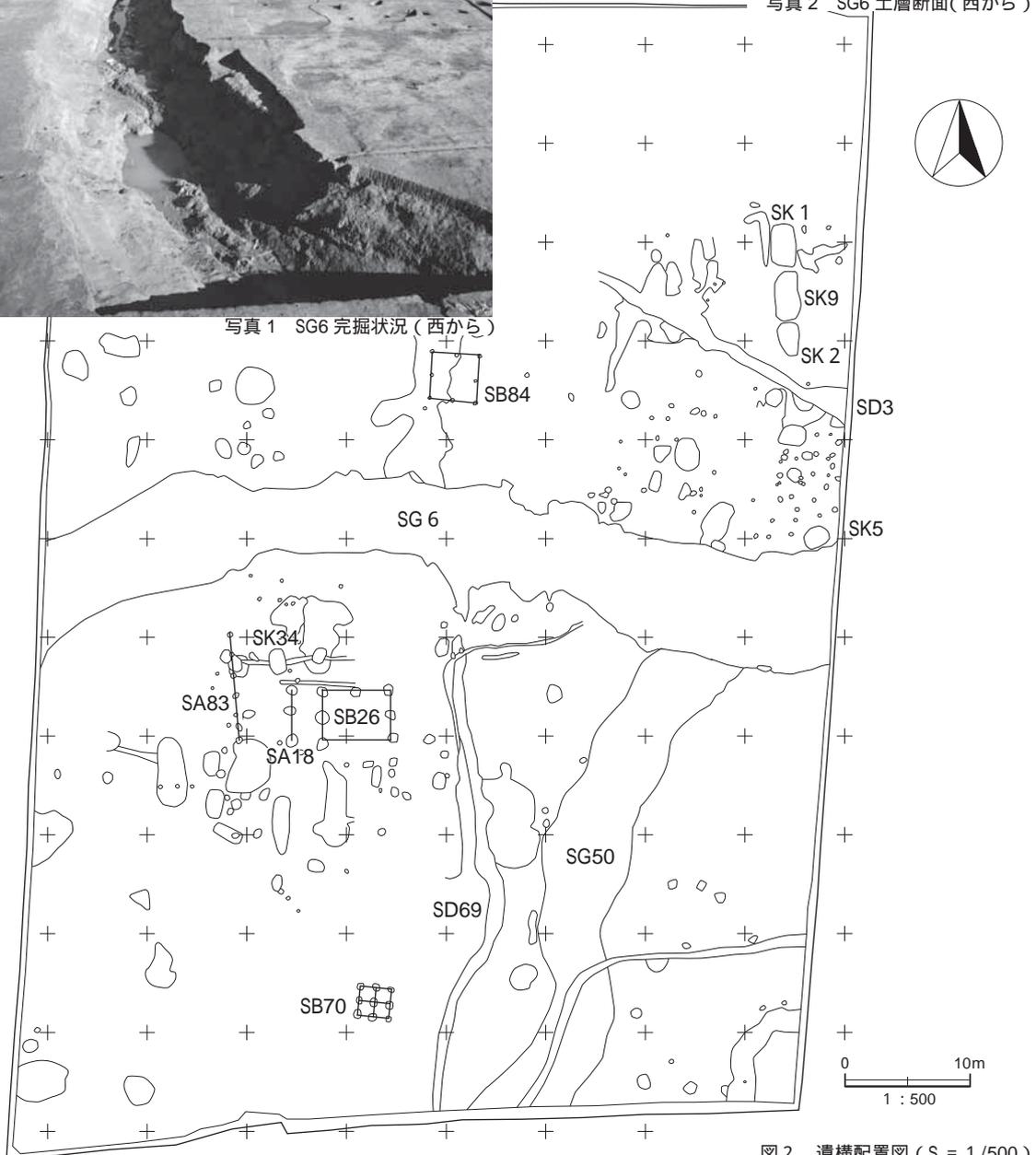


図2 遺構配置図(S = 1/500)



写真3 SK9 遺物出土状況(東から)



写真4 SK34 須恵器甕出土状況(北から)

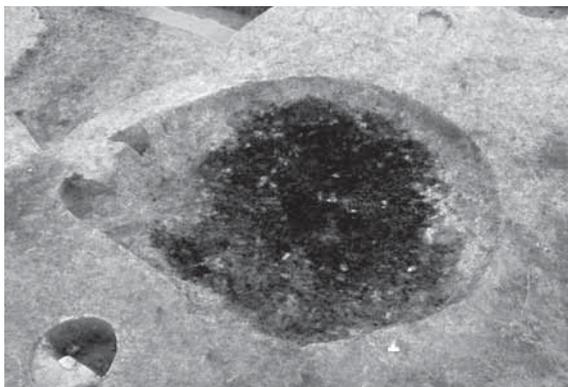


写真5 SK5 炭化物検出状況(南から)



写真6 SA18・SB26 完掘状況(北から)



写真7 墨書土器「定」-土師器坏体部



写真8 網代痕-土師器坏底部



写真9 出土木製品(人形/鳥形)